

平成31年度 ダビンチ（AO）入試

第1次選考

課題提示・レポート作成

（90分）

問題冊子

〔注意事項〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 答案用紙の記入については、下記の事項に従うこと。
 - ① 必ず「課題提示・レポート作成 解答用紙」の指定された場所に収まるように記入しなさい。
 - ② 記入は、横書きとする。
 - ③ 欄外や裏面に記入してはいけない。
 - ④ 絵や図表を記入してはいけない。
3. 問題冊子1冊、解答用紙2枚、下書き用紙1枚があることを確認しなさい。
4. 試験開始直後に、問題冊子が表紙1枚、白紙1枚、問題5枚あることを確認しなさい。落丁・乱丁および印刷不鮮明な箇所などがあれば、手を上げて監督者に知らせなさい。
5. この冊子の余白は適宜下書きに使用してもよろしい。
6. 試験終了後、解答用紙だけを回収します。解答用紙以外は持ち帰りなさい。

課題提示・レポート作成 課題用紙

次の文章をよく読んで、問1～問4に答えなさい。また、参考資料の資料①、資料②も適宜参照すること。

正倉院には、もはや今日では造り方のわからない器物が多数安らっている。かつての身体の記憶を宿した沈黙の器、技法の歴史記録が織り込まれた布、あるいは手業を塗り込めた漆。暮沢剛巳はそこに、アンドレ・ルロワ＝グーランが『身振りと言葉』で語る、技術の記憶収蔵庫を見る。直立歩行が手を体の①うんぱんから解放し、自由を獲得した手が口を労働から解放し、かくして口は言語を獲得する。だが手が道具を操る技術を獲得することがなければ、分節言語が発達することもなかっただろう。逆に、手先の労働が単純化され、キーボードを叩くだけで、十本の指で考える必要がなくなりつつある現代は、正常の系統発生の意味で、人間的な思考が一部（ア）することを意味する。それは種としてではないにせよ、個体の水準での退化の始まりであり、ひいては言語活動の空転に結びつく危険がある。そのようにルロワ＝グーランは「手の運命」と題した一節で②けいしょうを鳴らしている。

手が伝えてきた技能は、手によって形作られた形象のなかに封じ込められている。今日まで我々の手元に伝えられた器物・作品は、作られた結果 *opus operatum* であると同時に、そこに注ぎ込まれた技量すなわち操作術 *modus operandi* を（イ）した母胎でもある。それが言語化されていない記憶を宿したマトリックス、失われたテクネーとアルスの収蔵庫であることは、正倉院の宝物が如実に語りかけるとおりだろう。だが我々の側に「聴く耳」、「見る眼」（そしてお望みなら「嗅ぐ鼻」、「味わう舌」そして「触れる手」）がなければ、作品は語らず、その秘密を見せてもくれまい。過去の遺品が沈黙の墓標へと（ウ）するか、それとも遺産として将来の生命を育むか—それは我々が準備する将来に委ねられる。

「墓不要。残された作品をわが墓と思われたし。」これは、陶藝に一生を捧げた富本憲吉の遺言だった。人生は短く、藝術は長い。作品は、条件さえ整えば、作家の死後も、ながい生命を宿し続ける。だが生ける作品は、同時に作り手の墓でもある。かつて吉田光邦もまた、陶磁器に触れ、工藝作品とは人間が自然を殺すことで成る墓碑であり、であればこそ、立派な墓碑銘を刻むことに、人間の③せきむがある、と説いていた。

だが、それならば、果たしてその「墓」をいかに扱うべきなのか。富本憲吉は自分の墓を、後の世の人々がどのように扱ってくれるようにと欲していたのだろうか。我々はその「墓」を、内部に秘密を隠した棺として、蓋を閉じて安置すべきなのか。それともあえて墓の封印を解いて、その謎を人前に晒すべきなのか。埋葬か、それとも墓場暴きか。そのどちらを後世は選べというのか。そして我々には封印を解くだけの力量が保障

されているのだろうか。伝統を蘇生させるつもりで、あるいは現状維持の保存を意図することで、かえって遺品の破壊に手を貸す恐れはないのだろうか。

高松塚と呼ばれる墓を発掘した現代は、現代の保存修復技術が自然に劣ることを、一九七二年の発見後、わずか三十五年あまりで露呈した。二〇〇六年八月、文化庁長官としてその失策の責任を表明した直後に脳梗塞に倒れた河合隼雄は、かつてこう語った。魂とは、体と心を分離しようとする瞬間に失われる「なにもの」かである、と。とすれば、高松塚古墳の壁画喪失は、現在の日本が「魂」を（エ）しつつあることの、痛切なる黙示だろう。石棺という「体」の管理を自動④せいぎよに任せ、「心」の配慮を怠るや、棺の壁面は、いつしか黴に覆われていたのだから。後の世に「喪失」を伝える使命を負ったこの「負」の遺蹟は、自らの破壊を代価にして訴えている。ものに魂を込める営みには、体と心との接点を維持し、「魂」を育むことが不可欠だ、と。そこに手仕事の使命があらたに再定義される。「魂の唯物論的な擁護」。時代の要請するこの反時代的な格率が、文明の「手相」を照らしだす。

日本語の「もの」はミクロネシア系の言語と起源を共有し、例えば太平洋は、南西端のマオリ、北端のハワイ、東端はタヒチに拡がる「マナ」などと⑤どうこんとする説もある。この単語には生命の霊力や霊の権能が籠っており、「モノノケ」に怯える古代人の心性が媒介されていた。だが、現代の情報化社会は、頭脳の教育を、ひたすら身体から（オ）する方向を目指している。「もの」は、そこに宿していたはずの魂を抜かれ、人間の意思や欲望を充足するための、単なる素材へと切りつめられている。

二〇〇三年の新学習指導要領の導入とともに、教育の現場では、図画工作という美術教育の時間をさらに（カ）して、コンピュータ・リテラシー養成のためにより多くの時間を割り当てる措置が取られている。電算機を操る能力が、現代の社会的需要に応じうる次世代を準備するために、不可避と判断された結果だろう。だがそれは、電子機器関連の需要⑥そうしゅつに経済の基軸を転換する政策とも連動している。さらにこの選択は、分節的視覚情報の処理能力に偏重した学力養成が、国策として、さらには世界的な趨勢として、推奨されていることの証でもある。それが青少年の情操に芳しからぬ影響を与える元凶となり、世間を騒がせる未曾有の青少年犯罪の⑦おんしょうとなっているとの説もある。その当否については、なお専門家の見解も分かれている。ただこの措置が、手の退化を促進し、ヒトの進化を司ってきた古い身体的記憶との断絶を奨励する抜本的なプログラムであることだけは、否定しがたいだろう。「もの」に命を吹き込む営みは、教育の現場において、ますます（キ）されている。それが、情報化社会にとって必須のはずの身心観を見落とした⑧たんらくであり、やがて目指したはずの情報化社会そのものの根幹を揺るがし、あるいは根元から劣化させる危険を宿した選択であることは、以上の記述によって、ほぼ確認できたのではないだろうか。

<出典>

稲賀繁美「工藝の将来あるいは「ものづくり」再考」（稲賀繁美編 『伝統工藝再考 京のうちそと一過去発掘・現状分析・将来展望一』、思文閣出版、2007年）。

<語句>

アンドレ・ルロワ＝グーラン（1911-1986）：フランスの先史学者・社会文化人類学者。
テクネーとアルス：前者はギリシャ語で、後者はラテン語。本書中の筆者の表現を借りると「工（テクネー）と藝（アルス）」。

吉田光邦（1921-1991）：科学技術学者。

河合隼雄（1928-2007）：心理学者。元文化庁長官。

<参考資料：高松塚古墳の壁画喪失に関する新聞記事>

資料① 2003年3月13日 朝日新聞（大阪本社） 朝刊

高松塚古墳 石室にカビ

保存法見直しへ

石室の壁画が国史指
定されている高松塚古墳
(奈良県明日香村)で昨
秋以降、石室内にカビが
大量に発生していること
がわかり、文化庁は保存
管理の方法を見直すこと
にした。

72年の発見後、石室は
密閉状態で保存されてき
た。文化庁によると、01
年9月の定期点検の際、
石室内に複数の目カビが
増え、カビが確認された。マ
ルロールでも採取された
したが、昨年10月に再び

壁面の数カ所に、より取
り除きにくい黒カビが発
生した。いまのところ絵
が描かれた部分にカビの
被害はない。

現在18度前後に保たれ
ている室温は発見時より
2度前後高く、水分を多
く含んだ壁面部分にカビ
が生じているという。ま
た、数十匹のムカデやワ
ラジムシなどの死骸が石
室内で発見されたことか
ら、同庁は「虫が通過で
きるほどの穴ができて、水
が入っている可能性があ
る」とみている。

◇ 石室の保存施設の間の
のではなにかという話も
聞いたことがある。文化
庁は「いかり対応してい
く」と述べた。

資料② 2006年9月14日 朝日新聞（東京本社） 朝刊

飛鳥美人、劣化進む

高松塚古墳 東壁7カ所にカビ

文化庁は13日、奈良県
明日香村の特別史跡、高
松塚古墳（7世紀末）の
世紀初めで、国宝の石室
壁画の「飛鳥美人」の
劣化が著しくなるとして
知られる東壁の7カ所に
カビが広がったと発表
した。カビは壁の隙間に
入り込んだケル状物質で
覆われた。除去が難しく
いものとみられ、黒くぼ
んぼんとしたカビが、エタ
ノール殺菌した。

文化庁は「昨年9月か
らカビ対策で実施してい
る石室内部の湿度を低く
保つたが、カビは発生し
てきた」と発表し、カビ
の発生は「飛鳥美人」の
劣化が著しくなるとして
知られる東壁の7カ所に
カビが広がったと発表
した。カビは壁の隙間に
入り込んだケル状物質で
覆われた。除去が難しく
いものとみられ、黒くぼ
んぼんとしたカビが、エタ
ノール殺菌した。

文化庁は「昨年9月か
らカビ対策で実施してい
る石室内部の湿度を低く
保つたが、カビは発生し
てきた」と発表し、カビ
の発生は「飛鳥美人」の
劣化が著しくなるとして
知られる東壁の7カ所に
カビが広がったと発表
した。カビは壁の隙間に
入り込んだケル状物質で
覆われた。除去が難しく
いものとみられ、黒くぼ
んぼんとしたカビが、エタ
ノール殺菌した。

文化庁は「昨年9月か
らカビ対策で実施してい
る石室内部の湿度を低く
保つたが、カビは発生し
てきた」と発表し、カビ
の発生は「飛鳥美人」の
劣化が著しくなるとして
知られる東壁の7カ所に
カビが広がったと発表
した。カビは壁の隙間に
入り込んだケル状物質で
覆われた。除去が難しく
いものとみられ、黒くぼ
んぼんとしたカビが、エタ
ノール殺菌した。

問1

下線部①～⑧のひらがなを漢字で書きなさい。

(配点率 16%)

問2

(ア)～(キ)に入る語彙を次の選択肢から選んで書きなさい。

欠落 削減 喪失 排斥 剥奪 封印 埋没

(配点率 14%)

問3

二重線部「封印を解くだけの力量」とは具体的にどのようなものか。文中の言葉を使って45字以内で説明しなさい。

(配点率 20%)

問4

波線部に関して、人々が「もの」の本来の意義や価値(「魂」)を見失い、それを人間の意思や欲望を充足するための、単なる素材としてしか扱わなくなってしまった実例を挙げなさい。また、そのようなことが繰り返されないようにするために、あなたは京都工芸繊維大学でどのような学習や経験をして、何を身に付ければよいと考えますか。以上のことを600字以内で述べなさい。

(配点率 50%)